

「不易流行」

日本赤十字社診療放射線技師会 会長 正者 智昭

不易流行とは蕉風俳諧の理念のひとつで「新しみを求めて変化していく流行性が実は俳諧の不易の本質であり、不易と流行とは根元において結合すべきであるとするもの」とあります。ビジネスでは「時代が変わっても変えてはいけないことと時代に合わせて変えなくてはならないことは常に両方が存在し、変えてはいけない部分を守るためには変えなければならない部分がある」―業績不振だった USJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）をV字回復させた森岡毅氏の本で知った言葉です。

私が入職してから約40年、放射線医療分野や関連する情報技術等は大きく進歩発展し、それはこれからも続くであろうことは改めて述べるまでもありません。最近では、法令の改正によって医療被ばく管理と管理体制の構築やタスクシフトの推進などにより、診療放射線技師の活躍の機会が大きく広がりました。そして医療を取り巻く環境が厳しくなる中、専門である放射線診療業務を遂行するだけでなく、病院経営に対する意識改革も求められています。

この絶え間なく続く変化に対し真摯に取り組み、放射線画像診断検査や放射線治療の実施における専門家として、医療の不易を守るために日々努力と研鑽を積み重ねている会員の皆さんには、同じ診療放射線技師として感服するばかりです。変化を恐れて躊躇したり、あるいは社会や自施設のニーズ等に合わない過剰な対応をしたりすることなく、冷静かつ客観的にそして勇気をもって適切に変化していくことで、社会への貢献と信頼を獲得し新たなモチベーションが生まれることを期待いたします。

一方、法令改正等による対応は、外からもたらされた変化に対応していかなければならないという側面もあり、他律的な不易流行と考えることもできます。もちろん他律に適切に対応することは大変重要なことですが、もうひとつ重要なことは、変えてはいけないことを踏まえて、何を変えていかなければならないのかという事を自らが判断し実践する自律的な不易流行です。

自律的な不易流行の実践には、病院の理念や社会に対する使命などの不易をしっかりと理解し、変化を感じ取り、診療放射線技師として何ができるのかを考え、専門性を発揮しながら変えていく力が必要です。そのためにもひとり一人が専門分野はもちろん専門分野以外の知識も学び、専門力と豊かな教養を合わせ持つことで、諸々の課題に向き合い変化を取り入れる力を身につけていただきたいと思います。そして不易流行を常に意識し実践していくことで、自分たちだからこそできる良質な医療を提供し、「医師又は歯科医師の指示の下に、放射線の人体に対する照射をすることを業とする者」だけではない価値を、未来に向けて発揮し続けることができると信じております。